

第12回東京学術会議に350人 栄誉ある殿堂にて挙行



本学会の第12回東京学術大会が10月14日、学士会館で開催された。大会長は湯澤寛氏。一昨年の東京大会を上回る350人が全国から参加し、会場は満席となった。

会場の学士会館は由緒ある国の登録有形文化財であり、神田神保町の書店街から少し離れたオフィス街のなかにある。サラリーマンであふれる平日とは異なり、日曜日はふだん閑静であるが、近隣の学校が文化祭を開催していたため生徒、学生、父兄で会場周辺はにぎわいを見せていた。

大会は三谷寧氏による開会宣言によりはじまり、代表して湯澤会長に学会のシンボルであるテーマス像が手渡され、つづいて学会長挨拶そして吉田理事長による挨拶が行われた。

一般演題は午前と午後の部に分かれ、午前は「直立機構と発病の関係 - 自然治癒のカギは重力にあった -」（白井五郎、以下敬称略）、「大枠としての歩容観察の考察」（笠井浩一ほか）、「視床下部 神経下垂体ルート存在の意味、解き明かすに挑戦」（後藤雅文）、構医シンバイオティクス -

構医研との共同開発から十年 製造側の拘り -」（北村計司）、午後は「不明熱（成人スチル病の疑い）を患って - 構造医学からのアプローチ・臨床報告 -」（新宮領守）、「顎関節捻挫」（宮地尚彦）、「骨の対応適応 - 第2報 -」（新美寿英ほか）、「鎖骨骨折固定に伴う胸郭過拡張及び心拡張」（笠原芳幸ほか）計8題の臨床報告、研究発表が行われた。また、ランチョンセミナーとして水前寺診療所所長の住岡輝明氏が、「腸管の機能と構造」の教育講演を行った。

本誌では各発表者に原稿執筆を依頼し、今号より順次掲載していく予定。

ポスターの掲示も

本会場とは別に設置されたプレゼンスルームでは、ポスターの掲示のほか、新医療技術開発機構の機器・用具類、健康食品から書籍までの展示・説明会が行われた。口頭発表では時間の制約のために省略せざるを得なかった内容の掲載されたポスターを観ようと参加者たちが殺到していたのが印象的であった。



「湯澤寛学会長による挨拶」



「吉田理事長による総括」



住岡輝明氏による
教育講演「腸管の機能と構造」



「直立機構と発病の関係 -自然治癒の
カギは重力にあった-」
臼井五郎氏



「大枠としての歩容観察の考察」
笠井浩一氏ほか



「視床下部 神経下垂体ルート存在の
意味、解き明かしに挑戦」
後藤雅文氏



「構医シンバイオティクス-構医研との
共同開発から十年 製造側の拘り-」
北村計司氏



「不明熱(成人スティル病の疑い)を患って
-構造医学からのアプローチ・臨床報告-」
新宮領守氏



「顎関節捻挫」
宮地尚彦氏



「骨の対応適応 -第2報-」
新美寿英氏ほか



「鎖骨骨折固定に伴う胸郭過拡張及び
心拡張」
笠原芳幸氏ほか